貝殻とロザリオ

――ジャン・コクトーのキリスト教回帰をめぐって――

有　田　英　也

《Mon oreille est un coquillage/Qui aime le bruit de la mer》,
Œuvres poétiques complètes, Pléiade, 1999, p.180
「私の耳は貝のから／海の響きをなつかしむ」堀口大學訳『月下の一群』

はじめに

表題に掲げた「ロザリオ」は、フランス詩人ジャン・コクトー（1889-1963）が1925年6月19日、カトリックに回帰したことを意味する[1)]。ただし、コクトーと信仰という主題なら、物議を醸したキリスト教入信だけを問題にするわけには行かない。晩年に綴られた膨大な日記（*Le Passé défini*）全8巻、ここで試みに「決定過去」と訳しておく没後刊の著作にも、教義と教会史への言及が少なくない。また、よく知られているように、晩年のコクトーは若い頃から慣れ親しんだ南仏ヴィルフランシュ＝シュル＝メールや、遺体が安置されたミィ＝ラ＝フォレなど所縁のある土地の礼拝堂を室内装飾している[2)]。コクトーは詩や小説あるいは戯曲を創作し、映画を監督し、絵も描き、陶器に絵付けもしたマルチタレントであり、その表現行為のすべてが「信じること」に関わっているだろう。

そして、コクトーとキリスト教の神を問題とするなら、彼とギリシア・ローマ神話との関係を問わねばなるまい。劇作家としての代表作には『オルフェ』『オイディプス王』『アンチゴネー』がある。さらに、コクトーが自分のために作り出し、公衆に向けて披露し続けた「神話」についても考えねばならない[3)]。本論は、自己の人生と表現を神話化したい人物に、はたしてキリスト教信仰が可能なのか、と問う。誰よりも回心前後のコクトー自身と、彼のカトリック回帰を手ほどきした人物は、

それぞれの仕方で、そう問いかけたはずである。そのクリティカルな、つまり批判的で危機的な問いかけを1925年前後のコクトー著作に読み取ろう。英語でクリティカルの類義語であるクリューシャルは「十字」も意味し、これらの語の含意はフランス語でも変わらない。

表題に掲げたもうひとつの語の「貝殻」は、コクトーの詩の一節から取った。この「私の耳は貝のから／海の響きをなつかしむ」という2行は、堀口大學の訳で日本の読者によく知られている[4)]。読者の知覚は、耳と貝殻の形態的類似から、耳に押しあてた貝殻、あるいは巻き貝と化した耳に響く彼方の海のさざめきに誘われる。発表時に詩人は30歳に達しており、もう若くはない。貝殻に住まう肉は、もうそこにない。郷愁の対象は、ひとまずコクトーがその生涯においてしばしば芸術の拠り所とした幼年時代（enfance）と考えられる。本論の筆者は、コクトーの1930年代のジャーナリズム作品を扱った論考で[5)]、この詩人における「青春」「思春期」「幼年時代」の重要性と、これらの語句の可塑性について一応の見解を示した。本論では、1920年代半ばの詩人にとっての短い疾風怒濤時代に、貝殻と海が、個人の成育史とは別の文脈で示す展開を後づける。ここからコクトー作品の引用は、既訳を参考にしつつ本論筆者の責任において拙訳を用いさせていただく。

コクトーのカトリック回帰の社会的意義

1925年前後のフランスで、少なからぬ文学者がカトリックに回帰、もしくはユダヤ教からカトリックに改心した。ジャック・マリタンに導かれたジャン・コクトーのケースは、その代表的なものである。マリタンは、第二次世界大戦後にドゴール将軍に請われてフランスのバチカン大使を務めることになるキリスト教哲学者だが、1920年代はパリ郊外ムードンの自宅でとりわけ文学者と交際し、熱心に回心させたことで知られる。マリタンと親交のあった芸術家の入信者を挙げると、ユダヤ教徒では詩人マックス・ジャコブとモーリス・サックスがともに修道僧になった。ジャコブの勧めでカトリックに入信した詩人ピエール・ルヴェルディは、1925年6月頃、つまりコクトーが入信する頃にマリタンの家に出入りし、コクトーを早く回心させたがっていたとマリタン夫人ライサが回想している[6)]。コクトーがバレエ『パラード』を共同製作して

知り合った音楽家エリック・サティは、マリタンの導きでカトリックとして臨終を迎えたが、それはコクトーの回心の直後の 1925 年 7 月 2 日の出来事である[7)]。また、アンリ・ゲオンはジッドの古くからの友人で『新フランス評論』（*NRF*）誌の創立メンバーの一人だが、第一次世界大戦中に入信し、ドメニコ会の第三会員（世俗にあって修道会の規律に従う）となった。ゲオンはマリタンに戯曲『聖トマス・アクィナスの勝利』（1924）を捧げている。マリタンは当時のフランス文壇にあってカトリックの代表的批評家である。

コクトーの場合、この決断が作家の評伝で書かれているように、1923 年 12 月のレイモン・ラディゲの急死と喪の失敗によるアヘン依存、そして 1925 年 3 月に始まる解毒治療によってもたらされたことは否定できない。コクトーは恋人の死に伴いアヘン中毒者になった[8)]。そして、トラウマを克服するためにマリタンに救いを求めた。だが、それが個人的な決断にとどまらないことは、1926 年 5 月にコクトーとマリタンがそれぞれ長文の「ジャック・マリタンへの手紙」と「ジャン・コクトーへの返答」を出版したことから知られる。そこにはみずからの文学的軌跡を薬物中毒と回心の相のもとに描くコクトーと、迷える前衛作家をキリスト教正統に位置づけようとするマリタンの、必ずしも嚙み合わない対話が読み取れる。

そこで本論は、1923 年からコクトーの没する 1963 年までの往復書簡集（1993 年刊）を参照して、カトリック回帰と、その後の師弟の訣別を、1925 年前後のフランスの精神史的状況と関連づけてみよう。

海の響き

そこで本論は、まず「私の耳は貝のから」という一節を、コクトーのカトリックへの回心と、その直後に発表された「ジャック・マリタンへの手紙」と「ジャン・コクトーへの返答」に照らして理解しよう。次に、多くのフランス作家をカトリック回帰に導いたマリタンと、信仰を欲したコクトー双方の接点と相違点について、手紙に基づいて考察しよう。

最初に指摘しておきたいのは、コクトーが貝殻を耳に当てる動作を、事物に神の顕現を求める行為に重ねるのは、1925 年のカトリック回帰より前の文学的テクストに見られることである。コクトーが「小説のポ

エジー」と読んだ小説群の最初の作品で、作家が自らの創作行為の嚆矢と認めた『ポトマック』の「趣意書」(1916) には、クリスタルガラスの文鎮にまつわる次の一節がある。

「耳を貝殻に当てて海の響きを聞く人々のように、この立方体に目を近づけて、そこに神が発見できると思っていたものだ」[9)]

縁日の宗教玩具らしい文鎮と、夏のヴァカンスの置き土産とが、幼い詩情を表しているようでもあり、あるいは彼方への激しい希求を恥じらいながら漏らしているようでもある。だが、「ジャック・マリタンへの手紙」に読める次の 2 箇所で[10)]、コクトーは宇宙の無限と自我との卑小のパスカル的な対比を用いて信仰告白をしている。

「私は見つめるのだ、海を、空を、星々を、私たちの卑小さによって無限の空間が見えるあの堅実なものを。私たちは神の住処にある事物に暮らしている」

大自然は「神の住処」であり、その知覚に達した詩人が歓喜を語っている。手紙の先に読める次のくだりは、覚醒者のする一種の垂訓と言える。

「おや耳を当てて神の声を聴いているのにそれが聞こえないとは可哀想な貝殻だ。人間は自分の声を聞いているつもりでいる」

現代人は、被造物たる貝殻を通して神の言葉に耳を澄ませるべきなのに、自我の呟く言葉に酔いしれている、と詩人は嘆く。そして、「これが 19 世紀の強情者たちの文学。これが文学の全てだ。ではどうする？」と、あるべき文学を問う。そして、「神のための芸術」が提示される。

このように、カトリック回帰の時期に貝殻は、神の声に通じる海の響きを聞き取り、聞き分ける技芸を意味するようになる。

当時は未公刊だったコクトーのマリタン宛て書簡からは、初々しい感想が読める。1925 年 8 月 4 日、避暑地のヴィルフランシュ＝シュル＝メールから、コクトーはマリタンに宛ててこう記している。

「私は部屋から教会まで陽を浴びて歩きます。とても美しい教会です。私はそこで思いのままにあなたを見出し、私たちの友人たちと話すのです。あなたは私の良き天使です。あなたは私にバレスがブールジェに感謝しているあの〈公衆〉とはまるで異なるもの、つまり小部隊をくださいました。それはトマが海軍陸戦隊の男たちを愛したように、私が惚れ込んでいる小部隊なのです」[11)]

マリタンが喩えられた「天使」の意味は後述するとして、この「小部隊」とはマリタンを師と仰ぐ若手作家たちのことで、前便（7月25日消印）では「私たちの小家族」[12)]と呼ばれている。彼らは雑誌『金の葦』に集ったが、先輩格の同人は前述のアンリ・ゲオン、『ヌーヴェル・リテレール』の名インタビュアーのフレデリック・ルフェーヴル、スタニスラス・フュメ、後述するようにシャルル・モーラス率いる極右国粋団体アクシオン・フランセーズと近しいアンリ・マシスらだった。モーリス・バレス（1862–1923）がポール・ブールジェ（1852–1935）に感謝する公衆とは、おそらく小説『蛮族の眼の下で』（1888）を好意的に書評したブールジェが若いバレスの名を世に知らしめ、結果としてブーランジェ将軍派（憲法改正派）の国会議員に押し上げたことを指すのだろう。アカデミー・フランセーズ会員でナショナリスト作家、そして国会議員であるバレスの名は唐突に響く。バレスは、かつてコクトーとは違った立ち位置で前衛を代表していたブルトンやアラゴンらダダイストから生前に模擬「裁判」にかけられ、その古風で美麗な文体で青年読者多数を惑わせたために有罪とされたことがある。1925年当時、コクトーはシュルレアリスム第一宣言（1924）を果たしたブルトンの一派から忌み嫌われていた。トマが愛した海軍陸戦隊とは、コクトーの小説『山師トマ』でベルギーの要塞陣地に配された主人公の少年トマ・ド・フォントネーを、まるで「マスコットのように」可愛がった荒くれたちのことである。文学史的な解説が長くなったが、コクトーにとってマリタンは文学サロン風の会話が通じる相手と認識されている。

翌年冬には同じヴィルフランシュから詩をマリタンに送っている（1926年1月8日）。「最新作を同封します。その後は芸術の女神たち相手の商売から足を洗いましょう。作品は私たちの本の末尾に付けてください。珍しくて力強い作品だと思います。もし間違っていたら、ブレモ

ン神父とドリュ・ラ・ロシェルに席を譲ります」[13)]。「私たちの本」とは、『金の葦』の発行元プロン社で準備されていたコクトーの詩集のことだが、結局、コクトーの版元ストック社から『オペラ』として世に出ることになる。往復書簡の編者ブレソレットとグロードは、言及された作品を『オペラ』所収の散文詩「胸像」と推定している[14)]。ブレモンは1923年にアカデミー・フランセーズ会員に選出されたカトリック系文芸批評家で、1925年10月末に「純粋詩」という概念を提唱していた。ドリュ・ラ・ロシェルは前述のモーリス・バレス裁判で「証人」となった若手作家で、戦争中に自費出版した詩集『審問』がバレスに推奨された。ちょうど前年、ドリュは『新フランス評論』8月号に「シュルレアリストの真の過ち」を発表し、「若者たちよ、こんなに早く君たちは神の国を拒絶するのか」という結びの一文によってアラゴンを驚かせ、絶交に至ったばかりだった[15)]。ドリュの怒りはシュルレアリストがカトリックの外交官作家ポール・クローデルをアルジェリアの現地人弾圧の共犯者として断罪するビラを撒いたせいだが、コクトーはここでもサロンでの会話めかして売文業からの引退をほのめかす。

コクトーはカトリック回帰と創作力の相乗効果を喜んだ。その証拠に、カトリック回帰の翌月から執筆を始めていた「ジャック・マリタンへの手紙」を、マリタンの「ジャン・コクトーへの返答」とともに、内容を互いに確かめ合って翌年1926年5月に出版する。その経緯は注に譲ろう[16)]。

「ジャック・マリタンへの手紙」には、回心に伴う心境の変化を語るために、クローデルから貰った手紙の一節が引かれている。「我々の少なからぬ者がそうであるように、新人の馴致期間は貴君にとってかなり不快なものになるかもしれない」。コクトーは不快さを分析して、「最初のうちはどれだけ驚いたことだろう。私たちは自分で自分の世話を焼いていたが、今では占領されている。土地が敵に占領されているように、友に占拠されているのだ。神がすべてを引き受けてくださるが、おかげで自尊心が傷つくのだ」と書いている。コクトーのこの文章を意識してマリタンは、1926年2月26日付書簡で、「君はあたかも全面占領されずにいられるかのようだ」と、心から神に帰依しないコクトーを諫めている[17)]。

さらに、同年6月17日に戯曲『オルフェ』が初演される。この一幕

物の第一場で、オルフェは、「人が貝殻の中に海の響きを聞くように、僕は自分の声を聞く」と言う。先に引いた「ジャック・マリタンへの手紙」の一節のごとく、貝殻を耳に当てて「自分の声を聞いているつもりでいる」詩人は、妻エウリディケから「あなたは書くことを拒否している」と詰られている。ならば、オルフェが妻を失うのは、神の声を聞かない独りよがりの強情者だからであろう。このように、回心はコクトーによるギリシア神話の解釈を深化させている。

ところが、同年3月3日付の手紙でマリタンに伝えたように、ふたたびアヘンに手を出していたコクトーは、再度の解毒治療の後、精神のバランスを逸してしまう。パリ近郊ヴェルサイユのホテルから出された7月10日付の手紙に読めるように、『オルフェ』を観た『ルヴュ・エブドマデール』編集長ル・グリが、「なにゆえマリタンは、かくも芝居掛かった冒険に手を染めて危ない橋を渡るのか」と書いたことに胸を痛めたコクトーは、「あなたを損ねていると思うと身震いがします」とマリタンを気遣ったからである。風刺新聞『ル・リール』に至っては、回心そのものを揶揄して、「知るがいい、コクトー氏よ、屋根の上の牡牛と一緒に天国には上れないのだと。まもなく聖体拝領が流行するだろう」と手厳しかった。コクトーは、「私は平気です、慣れていますから」とすっかり意気消沈している[18)]。そのためマリタン夫人ライサは、7月14日付の手紙で、「『手紙』がカトリック読者や、（中略）私たちの友人ル・グリより良質な人士からどれだけ［好意的に］受け入れられているかあなたは忘れているわ」とコクトーを慰めねばならなかった[19)]。

だが、コクトーは驚くべき仕方で自信を取り戻す。彼は翌年1927年に自らの同性愛を告白する『白書』を準備し、その出版をめぐってマリタンのコクトー宛1928年6月13日付け書簡に見えるように論争となる。詩人は、次に引くマリタンの警告を無視して、ついに『白書』を同年7月25日に出版する。

> 「もし『白書』の中身が君の語るものであるなら、それを出版することで、君は悪魔と契約を結ぶのだ。燃える手が君の手首を掴んだら最後、もう放すまい。匿名で20部なんて言い訳にならない。疑心を眠らせる幻だ。2年後には200部だろうし、5年したら廉価版を1万部だ。（それにその20部だって無料ではあるまい。高価な本

だろうね。哀れなジャンよ、君には身売りの自覚があるのかい）」[20]

マリタンが追記した「神を愛したくなかったのなら、どうして君は神の元へ行ったのだ。哀れなシャルル神父」という嘆きは無駄になるだろう。シャルル神父とは3年前にマリタンの礼拝堂でミサを執り行ったシャルル・アンリオン神父のことである。

また、マリタンはコクトーが小説めかした告白を匿名で出版しようとしただけでなく、新しいパートナーであるジャン・デボルドの詩的散文集に序文を書いて1928年6月27日に出版させたことにも憤った。「私はデボルドよりも君を告発している」（同年6月30日）とデボルドの作品を読んだマリタンはコクトーの出版意図を批判した。「冒涜が本の〈素材〉だなんて、私を信じこませたりしないでおくれ。君が序文を書き、世に出してやったこの本で、君は幼稚にもキリストを裏切っているのだ。身勝手な子どもが罪を犯すように」[21]。マリタンは、「ジャック・マリタンへの手紙」と「ジャン・コクトーへの返答」を増刷させないよう版元ストック社に申し入れた。

たしかに、1925年の回心の失敗は、3年後にコクトーが出版した『白書』で詳細に語られる。だが、カトリック回帰そのものは、コクトーの人と作品に決定的だった。回心はコクトーにとって、編集者に揶揄された時も、マリタンと不仲になって後も、他人に批判される自分の特質を独り掘り下げて表現し、そのことで世の称賛を得るまたとない機会となったからである。

マリタンとの決別の後、三たびサン＝クルーの解毒治療院に入ったコクトーは小説『恐るべき子どもたち』を執筆して、1929年に出版する。中毒治療そのものも画文集『阿片』（1930）に結実する。「聖なる事物の冒涜が本の〈素材〉」になる、というマリタンの心配も頷ける。コクトーはラディゲの死後、とりわけ解毒治療後の倦怠感のせいで何も書けなくなったから、「ジャック・マリタンへの手紙」に言う「神のための芸術」に飛びついた、という功利的解釈も成り立つのである。

だが、公開状「ジャック・マリタンへの手紙」と未発表の手紙を、「天使」と「悪魔」という語に注意しながら読み直せば、コクトーがトラウマの言語化と誠実に向き合ったことが分かるだろう。

天使と悪魔

「天使」と「悪魔」は、コクトーの詩、散文、デッサン、戯曲、映画を貫く特徴的主題であるが、「ジャック・マリタンへの手紙」にも随所で現れる。

マックス・ジャコブから告解と聖体拝領を勧められたコクトーは、「何だって？　君は僕にアスピリンの錠剤のように聖体のパンを勧めるのかい」と応じた。するとジャコブは、「聖体のパンはアスピリンの錠剤のように服用すべきだ」と答えた。ジャコブの詩には、作者があまりに馬鹿なので激昂する天使が登場するが、「今度はマックスが天使になって私を叱る番だった」[22]。コクトーはヴィルフランシュからの手紙でマリタンを「私の良き天使」に喩えたように、医療者なり薬なりを天使になぞらえている。それは軽口とも言える「天使」という語の用法であろう。だが、この主題は、コクトーがアヘン中毒と解毒の間を往還していた時期に深化して、「天使ウルトビーズ」の主題を誕生させる[23]。そして、「ジャック・マリタンへの手紙」でコクトーがアヘン中毒について、「生と死は１スー硬貨の裏と表と同じだけ離れたままだが、アヘンは硬貨を貫くのだ」[24] と書く時、地上と天上は薬物に媒介されている。ならば、故人が天使になって出現してもおかしくあるまい。

次の引用は、天使と人間の存在様式の違いを速度で表した点が興味深い。

> 「減速機があらゆるものから天使を、まるで栗をイガから押し出すように出させるのだが、あの天使ほど僕の気を引くものはない」[25]

この「ジャック・マリタンへの手紙」の一節によれば、天使と地上の事物がまったく異なるスピードで動いているため、減速機あるいはスローモーションの技法がなければ、生者の目には天使と死者が見えない。『肖像と回想（わが青春記）』のコクトーは、『フィガロ』読者のために、高踏派の代表的詩人カチュル＝マンデス（1841-1909）の肖像デッサンを挿絵とするにあたって、カリカチュアと混同しないよう警告する。「もし記事のデッサンが皆さんを驚かせるとしたら、僕が当時のカリカ

チュアを一枚も使っていないとご了解ください。僕は記憶に頼って描きます。作家のペンと素描画家の筆を同じリズムで使おうと試みているのです」[26]。この鉄道事故で轢死した詩人を描くコクトーは、輪郭を一本の線で引かずに、斜線を連続させて影のように処理している。この亡霊を描くかの筆致で次に描かれたのが、サラ・ベルナールやエドモン・ロスタンなど、『肖像と回想』で言う「聖なる怪物たち」である。

つまり、「ジャック・マリタンへの手紙」の「減速機」は、『肖像と回想』で言う「記憶」であって、それらはアヘンの効果に擬えられている。コクトーによれば、「死者が少しでもブレーキをかけると、出会いの場(《une zone de rencontre》)ができる」が、アヘンこそ生死の境を貫いてくれる。その効果には個人差がある。人によってアヘンはコルクの浮きにも、鉛の重りにもなる。「アヘンは私を沈めていた。この潜水服のせいで私は浮かんで漂うことができず、じかに接触する感じだった」[27]。ならば、コクトーはアヘンの力を借り、記憶の中で生死を往還して、故人と出会うのだ。それは天使か悪魔のような存在である。

たしかに、カトリック回帰を果たしたコクトーの使う「悪魔」は時として神に対置される。だが、「ジャック・マリタンへの手紙」に見える次の一節は、神と悪魔の互換性に触れている。

> 「願いが叶うなら、知性が悪魔から神に返され、心は子どもの人々(enfants de cœur)を、信仰と法を持ち、神と悪魔を信じ、なんだってする海賊たちを、生暖かい聖なる薄暗がりに放ってやりたい」[28]

ここにはコクトー文学に一貫する「子ども」への信頼がある。知性は悪魔から奪還されるべきで、それこそが「神のための芸術」の目的だろう。しかし、その芸術の享受者は、「心は子どもの人々」(堀口大學訳では「純情の子ら」)か、もしくは「神」も「悪魔」も信じており、彼らなりの「信仰と法」を持つ「海賊たち」、つまりは詩人のような無法者である。コクトーは彼らを、知性から邪魔されずに善悪不分明の閾で遊ばせたいのである。

貝殻とロザリオは、かつて聴いた海の響きを懐かしむ道具である。知性を失っただけで世界の神秘に感覚が開かれるかどうかはともかく、コ

クトーは薬物にそのような効果を感じた。だから、自分をカトリシズムに導いたマリタンへの公開状であるにも関わらず、コクトーは、「アヘンは手品師がイエスに似ている限りにおいて宗教に似ている」[29] と、まるで宗教のアヘンとしての効用を語る『ヘーゲル法哲学批判　序説』のマルクスのように語る。また、中毒の動機を、「フロイトの言う病への逃避（《Flucht in die Krankheit》）」と説明し、テルム・ユルバン療養所の中毒還元治療の日課を、「シャワー、電気浴、アストラカンの毛皮のように縮れた神経系統」と振り返るなど、「ジャック・マリタンへの手紙」には一定の学術性がある。さらに、コクトーは最初の治療中に書いた日記を公開書簡の宛先マリタンに読ませようとしている（《Je vous passe le journal d'une désintoxication》）。そこに記録文学の客観性も認められるだろう[30]。

自身を診察台に乗せて文章を綴るコクトーにとって、アヘンと宗教には道具としての類似がある。このように治療を経て薬物を制御する自信がついたことでアヘンとの付き合い方を変えたコクトーは、アクロバットというかねてより偏愛の主題を、先に見た潜水という彼にとって薬物依存に特有の主題と取り替える。

> 「私は自分の道を宙に求めねばならなかった。この綱渡りが私をカトリシズムに、つまり私の家に導くのだ。だから、回心を云々するのは間違っている。それにしても、どうすれば誰も驚かせずにすむのだろうか。軽業師の見かけは一朝一夕で抜けないからなあ」[31]

本論ではコクトーによる 1925 年の決断を「キリスト教回帰」と呼び、あえて「回心」としなかった。それはピンと張った綱（タイトロープ）を掴んで宙に上ったら、幼年時代を浸していたキリスト教文化をふたたび見出した、という「ジャック・マリタンへの手紙」のこの一節による。アヘンの潜水服を捨てて、空中ブランコ乗り稼業に戻るまで、コクトーはしばしロザリオを手にしたのである。

なるほど、マリタンの返答は、「いつだって君は天使を気にかけていた」とコクトーの自己神話化に理解を示す。だが、軽業師を天に昇らせる綱については、およそ抒情的でない返答を寄せることになった。

「君の綱渡りの美学は、芸術に関するスコラ哲学にたやすく合流していた。見事な慧眼さでもって、君は（音楽の下に隠れた）詩のために、なすべき行いの精神性も、手にすべき永遠の生の精神性もあまねく訓導し、禁欲と瞑想のうちにその至高者の同類を持つような（しかし同類と言っても超越論的で超本性的な）浄化と放棄の大法を書いていたのだ」[32)]。

知覚できない絶対者に触れるには感覚を遮断せよ、とマリタンは言いたいのだろう。だが、コクトーの思い描く詩人は、その仮の姿が軽業師であるにせよ霊媒師であるにせよ、手品のように伸ばした綱で天に昇って言葉を盗んで来る子どもか海賊である。あるいはジャックと豆の木の少年かもしれない。

だからこそ、マリタンは信仰の導き手（frère portier）のプライドに賭けて、人間が独力で天使のように飛ぶのを認めない。回心する前のコクトーが求めていた詩は、「純粋状態の詩、敏捷な霊感の純粋なる悪魔」と退けられる。事物と言葉を直接に触れ合わせる無謀で悪魔的な試みだからだろう。コクトーが偏愛する空中ブランコやアクロバット、宙返りは、「死との戦い」なのだから、カトリック信仰を得た今、その先に「人々は君が絶望もしくは神の恩寵によって心臓を切り裂かれるのを見るだろう」[33)]。マリタンによれば、コクトーが気にかけていた天使は汚れた天使、悪魔に等しい存在となる。

「芸術は汚れた天使（ange impur）から自衛しにくい。汚れた天使は芸術の頬を打ち、自惚れゆえにあらゆるものを、心がみずからを贈与することも、心の弱ささえも、いや神さえも利用したがるのだ」[34)]。

このようにマリタンが作家、芸術家の自惚れを槍玉にあげたのは、彼らの内から 1925 年前後にカトリック回帰した者が輩出し、しかもユダヤ教から改宗したマックス・ジャコブやモーリス・サックスが、モンマルトル界隈で同業者を盛んに回心させていたからである。加えて、1926 年末にローマ教皇庁は、極右団体アクシオン・フランセーズの機関紙と代表のシャルル・モーラスの著書を断罪した。『金の葦』同人のうち、

モーラスと幾らか政治信条を共有していたアンリ・ゲオンとアンリ・マシスは新しい媒体を探すことになった。

1925年問題

1924年国政選挙は左翼連合の勝利に終わったが、ルネ・レモンの『1930年代におけるフランス・カトリックの危機』（親本は1960年刊）によれば、カトリック勢力はこれに対抗することも、政府を支持するかどうかで分裂することもなかった。前世紀末から教会の共和制加担が続いており、しかも「カトリック的な社会福祉主義は公認化されつつあった」[35] からである。大恐慌以後に、カトリック系労働組合と経営陣が、例えばノール県で対立すると、政教分離の伝統によって政党こそないものの、リール司教がキリスト教民主主義的心情を働かせて仲裁することさえあった。労使対立がさらに膠着してバチカンが書状で調停を図ると、教皇庁の介入に憤るのが極右のアクシオン・フランセーズで、『ラ・クロワ（十字新聞）』と『ラ・ヴィ・カトリック』が前者のガリカリスム（ガリア中心主義）つまり偏狭なナショナリズムを詰るという複雑な構造になった。しかし、1925年の問題は、前年に結成された全国カトリック同盟（F.N.C.）が、すべての信徒を団結させて世俗化に対抗しようとしていたことである。

浩瀚なシャルル・モーラス伝の中でピエール・ブータンは、モーラスの地位は、戦争中の対独復讐的ナショナリズムが退潮して衰えるどころか、むしろ文壇で支持者を増やしていたと言う[36]。アンドレ・ジッドらが創刊した『新フランス評論』の同人にアンリ・ゲオンのようにカトリック寄りになるものが現れたこと、文芸史家アルベール・チボーデがモーラスを評価し、「教授」ら知識人は左翼で「文学者」は右翼だと文化人を腑分けしていたこと、そして有力な新人作家アンドレ・マルローとドリュ・ラ・ロシェルが密かにモーラスの文才を讃えていたというのがその理由だが、苦しい説明である。むしろカトリックという政治的同盟者を失いつつあるモーラスが、文芸に活路を見出して若い書き手を探していた、と見るべきだろう。そして、若手作家を探していたのはモーラスばかりではなかった。

コクトーは回心する前からマリタンにプロン社から発刊される文芸誌

への協力を要請されていた。誌名を求められて「契約の箱舟」を提案し、マリタンから大袈裟だと断られ、1925年2月2日付の書簡で、「約束」なら「簡素で意味深長」[37]と持ちかけた。誌名は結局、「金の葦」に落ち着いた。プロン社ではマリタンが影響を与えたエマニュエル・ムニエが、1930年代初めに現在も続く『エスプリ』誌を創刊する。『金の葦』同人のひとりスタニスラス・フュメは、1925年戦後を、「知識人と芸術家への雷撃の時代」と評することになる[38]。

再キリスト教化運動の推進者で『ラ・ヴィ・スピリチュエル』誌の創刊者ベルナド神父は、ムードンのジャック・マリタン周辺に聖トマの研究サークルが組織されて作家が集まるのを歓迎していた。だが、コクトーが回心し、エリック・サティがカトリック教徒として病死するに至って、安易な回心を揶揄する声が上がりだしたらしい。実際、モーリス・サックスをマリタン宅に1925年8月2日に連れてきたのはコクトーであり、サックスは早くも8月29日にカトリックに改宗したばかりか、明けて1926年1月にはカルメル修道会で神学生となる。だが、その年の夏、南仏ジュアン＝レ＝パンでアメリカ人の少年に恋をしたサックスは、ヴィルフランシュのホテル・ウェルカムに投宿中のコクトーに恋人を紹介して立腹させてしまう。コクトーはマリタン宛の1926年9月26日付け書簡で、「モーリスはジュアン＝レ＝パンで宮廷司祭を演じており、ひどい連中に囲まれている」と報告した。「あらゆる破局から神学校によって救われたものだから、彼は模倣的性質のせいで白衣にすべてを賭け、白衣を脱げないのに違いありません」「彼にとっては環境がすべてです」[39]と投げやりである。それもそのはず、コクトーはその年の夏、戯曲『オルフェ』の上演のためにヴィルフランシュでデッサンを描いており、また後に『人間の声』『地獄の機械』で舞台装飾をすることになるクリスチャン・ベラール（通称ベベ）と一緒に、12月の個展「造形詩」に出品するオブジェ51点を制作していたのである。

しかも、「ジャン・コクトーへの返答」が書かれる早春の時点で、すでにマリタンにはコクトーに対する疑念が兆していたろう。先に引いた「芸術は汚れた天使から自衛しにくい」との一節に続いて、「親愛なるジャンよ、私たちにはいたるところに喜劇が見えるが、そこに文学界の宗教的目覚めが新たな輝きを与えることだろう」と書かれているからで

ある。それでも、コクトーにまだ希望を託していたマリタンは、前者の霊媒師的な詩人観を次のように肯定したのだった。

「聖人が受難の営みを完成させるように、詩人も創造の営みを完成させ、神的均衡に協力し、神秘を動かす。詩人は宇宙に働く秘力に同質化している」[40)]

さらに、マリタンはマタイ伝 4-4 の「人はパンだけで生きるものではない」を敷衍して、「言うまでもなく、芸術と詩は人類にとってパンよりも必要である」[41)] と、コクトーの回心が模範となることも期待している。事実、マリタンは 1926 年 2 月 26 日のコクトー宛書簡で、「多くの魂が君を信頼しており、その数はこれから増えるだろう。彼らを影のない光に導いてやらねばならない」[42)]、とコクトーの責任を強調するとともに、公刊される二通の手紙に宣教の効果を認めている。

一方、悪魔を手玉に取ろうとするコクトーの傲慢さが、宗教哲学者の不信を買っていた[43)]。とはいえ、マリタンはなおもコクトーを諫めようとする。次に引くのはモーリス・サックスの乱行について 1926 年 10 月 10 日に記した手紙の一節である。

「彼は司祭になるには社交人すぎた。だが、ふたたび堕落しないでいるために彼に何ができるだろうか。私はキリストの語る、さらに悪い七つの悪魔を考えている」[44)]

だが、貝殻を神の声を聞く道具と見る本論の見立てにとって決定的なのは、このように海や空の美しさを通して、被造物の中に神慮を見出す詩人の発想をマリタンが牽制していることである。1927 年 7 月 6 日のコクトー宛書簡には、「付け加えておこう、神がお造りになったものを通して、また被造物において神を愛するだけでは不十分なのだと」[45)] とある。マリタンの関心事は、前年 11 月にコクトーが知り合ったジャン・デボルドとの同性愛関係をコクトー自身に退けさせることにあり、この手紙をデボルトに読ませてほしい、とまで書いている。これから書簡集で白熱した議論を引き起こす『白書』の物語が、男性の身体美の礼賛から始まることを思えば、せいぜい「海の響きを懐かしむ」くらいの

抒情にコクトーを留めておきたかったことがよく分かる。

しかも、1927年に入ると、師弟の往復書簡からは、信仰と教会についての見解の齟齬が修復できないほど大きくなったことが読み取れる。コクトーが4月10日（枝の主日）に、「親愛なるジャック、考えてほしい、教会はもはや科学を火炙りにしなくなったことで〈進歩〉を余儀なくされたのに、変化を拒否しているということを。ならば、あなたのように精神の歩みの速い人間はどれだけ身を裂かれる思いだろうか」と書けば、マリタンは前述の被造物を愛でるだけでは神への愛が不可能だとする7月6日の長い手紙で、「教会が同性愛を断罪している」理由を、創世記の焼き払われた悪徳の都ソドムの名を挙げつつコクトーに言い渡すのである[46]。

それでは、マリタンらキリスト教神学研究者と知り合う前には交際がなかったカトリック系作家たちを、コクトーはどう考えたのだろうか。「ジャック・マリタンへの手紙」には、「彼らの幾らかはモーラスのところから来ている」[47]と、モーラスのギリシア旅行記『アンチネア』をからかい半分に引きながら訝って見せるくだりがあった。これに対してマリタンは、「私の門番修道者（frère portier）の徳を信頼して、君は自分を範とする魂たちを連れて来たものだ。私たちは友人を交換して失うところは無かった」と答える。さらに、注記して、「君の言うように幾人かは政治信条の点で〈モーラスのところから来た〉（その後も彼の元にずっととどまっている）。詩について言うなら、彼らは実はランボーのところから来ていたのだ」[48]と述べるとともに、「はたしてモーラスは自己を吟味するのか」とアクシオン・フランセーズ代表の頑なさを危惧したコクトーに、モーラスが機関紙に書いた、「オーギュスト・コントの懐疑論に何が起きるか、日に20回も考える」という言葉を引いて、「この3行を書いたことで、私はいっそうモーラスを称賛する」と断言している。

残念ながら、コクトーの『白書』がマリタンの期待を裏切ることになる。また、1926年12月末、バチカンは『アクシオン・フランセーズ』紙を禁書処分にした。そのため、若手のカトリック作家はモーラスを警戒し、やがて右でも左でもない独自の「1930年代精神」を形成してゆくだろう。一方で、その頃、つまり1930年代半ばのコクトーは左翼のジャーナリズムに接近し、1936年に『パリ・ソワール』紙に連載され

た旅行記『80日間世界一周　僕の初めての旅』によって読者大衆を摑むことになる。

コクトーにとって1925年のカトリック回帰は、自己との関係、他者との関係、自然との関係を激変させる事件だった。それを後年に振り返って詩人は、『僕、あるいは困難な存在』（1947）の「僕の逃走」で、「『ジャック・マリタンへの手紙』は、この信頼の危機を証言している。僕は人が普通、悪魔のせいにしているものを、神に責任転嫁できると思っていたのだ」[49] と書く。没後刊行を期した『決定過去』には、「1914年に、僕は宗教に入った」[50] とあり、マリタンの役割を相対化している。コクトーは自身との不安な関係を清算すべく、カトリック回帰という「病への逃避」をなした。対他関係では、これまで見たように、入信後のコクトーは、マリタン夫妻や若手作家たち（「小部隊」）と共同体的な触れ合いを求めつつも、市民社会における詩人の創作活動の意義を確信した。それは「神のための芸術」の主張にも、教会に進歩の義務があるというマリタン宛の手紙の主張にも明らかである。コクトーが自信を失って入信したのは事実だとしても、芸術の社会性に対する楽観的な確信は、入信前後で揺らいでいない。むしろ、それゆえに教会の権威をめぐって、また教義解釈の自由をめぐって、彼は頑ななマリタンと対立したのである。最後に、自然あるいは被造物について、コクトーは汎神論的な世界観を保持したままカトリックに回帰したが、マリタンはそれをアヘンによる感覚障害と、同性愛による歪んだ美意識のせいだと考えて譲らなかった。師弟の決別も宜なるかな、である。

たしかに貝殻とロザリオは、コクトーがラディゲを失った1923年暮れに始まる5年間を特徴づけるにすぎない。だが、コクトーは10年後の1935年、『フィガロ』紙土曜版にベルエポック回想記を連載するために投宿したヴィルフランシュ＝シュル＝メールのホテル・ウェルカムで、「生きること、奇跡を起こすことに夢中になった4年間」[51] を回想する。それはあたかも、『オルフェ』『オペラ』『オイディプス・レックス』を書き、ストラヴィンスキーの家に通った港町に戻って、「海の響きを懐かしむ」かのようである。

（本論文は2019年度成城大学特別研究助成「トラウマを語り継ぐフィクション――20世紀の故郷喪失者から考える」の成果報告の一部である）

註

1） カトリック家庭に生まれ洗礼も受けていたジャン・コクトーにとって「イエスの御心」の祝日の 1925 年 6 月 19 日の受洗は回心でなく、カトリック回帰と呼ぶべきだろう。ただ、その秘蹟は、聖職者でないジャック・マリタンがローマ教皇ピオ 11 世から秘跡の授与を特別に認められたムードンの礼拝堂で、シャルル・アンリオンがミサを執り行ってなされた。法学博士で弁護士だったアンリオンは、ポール・クローデルの影響で回心し、チュニジアで司祭を勤めた。アンナ・ド・ノアイユの詩の愛読者で、カリスマ的な砂漠の伝道者シャルル・ド・フーコーの弟子。Claude Arnaud, *Jean Cocteau*, Gallimard, 2003, pp.346-347

2） Jean Cocteau, *Le Passé défini,* tome I-VIII, Gallimard, 1983-2013　コクトーの教会装飾における写真および古典作品の二次利用に注目した次の論文も参照。Saurine Bonnafous,《Jean Cocteau dessinateur photographe》in Pierre Caizergues（dir.), *Jean Cocteau quarante ans après 1963–2003*, Centre d'étude du XXe siècle Université Paul-Valéry Montpellier III, 2005, pp.235-254；松田和之「コクトーの教会美術作品に描かれた「眠る兵士」に関する一考察」福井大学教育地域科学部紀要（人文科学　外国語・外国文学編）6, 2015, pp.75-105

3） コクトーとキリスト教については下記が有益。Adrien Bouhours, *Jean Cocteau apôtre de la modernité, une explication des sources de la Difficulté d'être*, Eurédit, 2018　自己神話化の観点からは、コクトー作品における「天使」「悪魔」「神々」たとえば使者メルクリウス（ヘルメス）などの人物像が問われよう。コクトーは「霊媒師」「聖人」「アクロバット」に模せられた芸術家像を提示している。入信後の 1926 年に、これまで発表した主な芸術論「雄鶏とアルルカン」（1918）、「職業上の秘密」（1922）、「無政府主義と見なされた秩序について」（1923）と「ピカソ」を合わせ、入信前の 1923 年付の序文を添えた評論集『警告』が出版された。序文は綱渡りを念頭に、「死の上を歩む男の所作は滑稽であるべきだろう」とする。Jean Cocteau, *Œuvres complètes,* IX, Marguerat, 1950, p.12

4） 堀口大學の訳詩集『月下の一群』所収。Cocteau, *Œuvres poétiques complètes*, Pléiade, 1999, p.180 *Poésies,* 1920 に収録されたきり再録のない「カンヌ」連作第 5 歌。

5）「雲居の貴婦人――ジャン・コクトーのベル・エポック回想記に見るモード観と思春期像」『ヨーロッパ文化研究』39、2020　本論では、表題に掲げた「雲居」に通じる場所への郷愁と期待が、詩人コクトーの表現に持つ意味を問う。

6） Jean Cocteau, Jacques Maritain, *Correspondance 1923–1963*, édition établie par Michel Bressolette et Pierre Glandes, Gallimard, 1993, p.68, p.80　コク

トーと出会う前のジャック・マリタン（1882-1973）について、プロテスタントとして育ち1906年にカトリックに回心したこと、母方の祖父ジュール・ファーヴルが第三共和制初期の代表的な共和派政治家であったこと、すでに1919年の著書『芸術とスコラ学』にコクトーの評論『雄鶏とアルルカン』を引用していたことに触れておく。Arnaud, *Ibid.*, p.338, 344

7） Jean Cocteau, Jacques Maritain, *Ibid.*, p.74「ジャック・マリタンへの手紙」では「楽聖の手本を示した」とされている *Ibid.*, p.268　コクトーは1925年7月14日付けプーランク宛書簡で、「この男は聖者だが、僕たちはそれを知らなかったのだ」と書くが、アルノーはコクトー伝で「告白なしに神を与えるべきではなかった」と詩人およびマリタンに批判的である。Arnaud, *Ibid.*, p.367

8）「ラディゲの死は私を麻酔薬抜きで手術してしまった」*Ibid.*, p.270 ラディゲはココ・シャネルの主治医ダリミエにチフス性の高熱と診断されて入院し、感染防止のため面会謝絶となって1923年12月12日に死去。コクトーは友人に自殺をほのめかし、悪夢に悩まされ、音楽批評家で中国文学翻訳者ルイ・ラロワにアヘン吸引を手引きされた。Arnaud, *Ibid.*, pp.305-314

9） Cocteau, *Œuvres romanesques complètes*, Pléiade, 2006, p.8『ポトマック 1913-1914』は「趣意書」を付して1919年に出版されたが、1924年9月に改訂されたのが決定版である。

10） Jean Cocteau, Jacques Maritain, *Ibid.*, p.286, p.290

11） *Ibid.*, p.84

12） *Ibid.*, p.83

13） *Ibid.*, p.96

14） *Ibid.*, p.98; Cocteau, *Œuvres poétiques complètes*, Pléiade, 1999, p.529 深夜に動き出して壁を抜けたローマの胸像が、眠っている男を窒息死させる物語である。

15） 有田英也『政治的ロマン主義の運命――ドリュ・ラ・ロシェルとフランス・ファシズム』名古屋大学出版会、2003、p.121

16） 回心から一ヶ月後の1925年8月17日消印の手紙で、早くもコクトーは、「私は一冊の本を書いています。この本は一通の手紙であり、あなたに宛てられています」（*Ibid.*, p.85）と後に「ジャック・マリタンへの手紙」となる文章の執筆を宣言している。だが、1926年2月1日にマリタンから「返答」を受け取ったコクトーは、詩作を断罪するような論調に驚き、書き直しを頼んだ。Michel Bressolette,《Le frère portier et l'acrobate I》in Jean Cocteau, Jacques Maritain, *Ibid.*, pp.21-22, pp.98-101 本論の注（34）も参照のこと。

17）《Nous nous occupions et nous sommes occupés, occupés par l'ami comme un territoire occupé par l'ennemi. Dieu se charge de tout et c'est là

ce qui dérange notre orgueil.》, *Ibid.*, p.281, p.104

18）「屋根の上の牡牛」はコクトー、ラディゲと仲間の音楽家ジョルジュ・オーリックらが集ったキャバレーの名。*Ibid.*, pp.114-115

19） *Ibid.*, p.116

20） *Ibid.*, p.166 同じ手紙でマリタンは、「そんなことをしたら君は初めて悪に加担することになる」とも警告した。

21） *Ibid.*, pp.177-8 師弟が決裂する前の 1928 年 2 月 4 日付け書簡に見える「まだ天使でいてください」（*Ibid.*, pp.163）という一節は、成績評価の甘い大学教員を学生が「仏」と呼ぶようなものだろうか。

22） *Ibid.*, p.271 この公開書簡の一節は、コクトーがマリタン、ライサ夫人と交わした私信で、「悪魔」「天使」「天使的」などの語を日常の語らいのように使っていることを思わせる。コクトー「悪魔そのものだなあ、ディアギレフってのは」（*Ibid.*, p.80）。ジャック「君の守護天使が君の手を引いたのだよ」（*Ibid.*, p.101）。ライサ「私たちは確信しています、あなたの著作はきっと残って、天使と人間の天を飾るでしょう」（*Ibid.*, p.116）。「ジャン・コクトーへの返答」の一節からも、手紙らしいくつろぎが伝わる。「私は君のことを鬼神（djinn）のようだと思っていた。妖精たちの純粋な戯れと不純なそれとを不意打ちしようと躍起で、腹にたっぷり悲しみを抱え、別世界に生まれついたような」（*Ibid.*, p.307）。コクトーならアラビアの鬼神より牧神（パン）を好むだろう。

23）『オペラ』（1927）所収の長詩「天使ウルトビーズ」と戯曲『オルフェ』（1926 年 6 月 17 日初演）のガラス職人ウルトビーズを参照。ウルトビーズ（Heurtebise）の名の由来は Cocteau, *Opium*, *Œuvres complètes*, X, Marguerat, 1950, pp.70-71 および Arnaud, *Ibid.*, p.326 に詳しい。マリタンは 1926 年 2 月 26 日付けコクトー宛書簡で、この詩をプロン社発行の詩集に収めるのに反対した（Jean Cocteau, Jacques Maritain, *Ibid.*, pp.103）。だが、同作は 1925 年にストック社からマン・レイのレイヨグラムをグラビア印刷した「天使ウルトビーズ」を添えた豪華版として 335 部限定出版されていた。戯曲での着衣は「労働者の青いオーバーオール、首にマフラー、布靴」である。衣装はシャネルが担当。

24） *Ibid.*, p.274

25） *Ibid.*, p.280

26） Cocteau, *Portraits–Souvenir 1900–1914*, Grasset, 1935, pp.148-155　引用は堀口大學訳を参照しつつ本論筆者が訳した。

27） Jean Cocteau, Jacques Maritain, *Ibid.*, pp.274-275

28） *Ibid.*, p.284

29） *Ibid.*, p.276

30） *Ibid.*, p.272, p.276「アストラカンの毛皮」は、ベル・エポック回想記で母

の着たボレロを思わせる。Cocteau, *Portraits–Souvenir 1900–1914,* pp.88-89

31） *Ibid.*, p.293 ここでコクトーは註（30）に挙げた『肖像と回想』で描くことになるメドラノ座のサーカスに言及している。Cocteau, *Ibid.,* pp.58-60 「回帰」と「回心」の区別は下記を参照。Bouhours, *Ibid.*, p.193

32） *Ibid.*, p.307

33） *Ibid.*, p.308

34） *Ibid.*, p.315 マリタンの返答を読んだコクトーの反応は、1926 年 2 月 1 日付の書簡に読める。コクトーは「判然としない細部があるので入念に教えてください」と留保した上で、「詩が裁判にかけられているように読めるのですが、それはきっと何箇所か理解が行き届かないからです」（*Ibid.*, p.99）と師に書いている。その後も、「ある若いアメリカ詩人に、あなたの返答を読んで聞かせたら、これは詩人に対する厳重な譴責――詩の告発だ、と思ったのです。全体をそれほど詩に敵対させないようにはできないものでしょうか」（*Ibid.*, p.100）と書いた。同年 2 月 20 日、コクトーはマリタンの意見を入れてアメリカのユダヤ青年 2 人組の完全殺人についての注（10）を訂正（*Ibid.*, p.101）。ついに 2 月 16 日、マリタンは、「君のゲラ刷りと私用のコピーを受け取りました。月曜に両方をストック社に届けましょう」（*Ibid.*, p.103）とコクトーに告げた。二通の手紙はコクトーとマリタンの共著と言えよう。

35） René Rémond, *Les Crises du catholicisme en France dans les années trente*, Cana, 1996,《Points Histoire》, p.13

36） Pierre Boutang, *Maurras La destinée et l'œuvre*, édition revue, La Différence, 1994, pp.502-507　ブータンは、心ならずもアクシオン・フランセーズと疎遠になったカトリック作家の心情を、ベルナノスが『ルヴュ・フェデラリスト』1926 年 11 月号に寄せた次の文章に代表させている。「モーラスよ、あなたの広大なる著作に、少なくとも心の中で与したカトリックの名において、お詫び申し上げる」Boutang, *Ibid.*, p.517

37） Jean Cocteau, Jacques Maritain, *Ibid.*, p.72

38） Bressolette, *op.cit.*, p.17

39） Jean Cocteau, Jacques Maritain, *Ibid.*, p.123-124

40） *Ibid.*, p.315, p.318 グロードは解説で、コクトーの詩人像を歴史的に位置付け、「19 世紀以来、言葉の魔術師を一般人より上に置き、芸術という宗教を、超越性を奪われ脱魔法化の餌食となった世界における不安の解消法とする論調」とする。Pierre Glaudes,《Le frère portier et l'acrobate II》in Jean Cocteau, Jacques Maritain, *Ibid.*, p.44

41） *Ibid.*, pp.320-321

42） *Ibid.*, p.104

43） 1926 年 10 月 9 日付けおよび 10 月 16 日付けマリタン宛コクトー書簡を

参照。「ご存知のように、もし悪魔が私に一杯食わせても、私にはまだ奴にしっぺ返しする力があります」「悪魔にやられっぱなしにはなりません」*Ibid.*, p.128, 132

44） *Ibid.*, p.130 新共同訳では「自分よりも悪いほかの七つの霊」マタイ伝 12 章 45。

45） *Ibid.*, p.150, p.151 この手紙には同年 8 月 11 日付コクトー宛書簡と同様、オリジナルは無く、保管された清書が採録されている。コクトーの手持ち資料の一部は秘書のモーリス・サックスが無くしたと言われる。

46） *Ibid.*, p.146, p.149 ブウールは 1927 年 4 月 10 日のコクトー書簡を境に「両者の間で、より一般的にコクトーとカトリシズムの間で調停不能になる」と述べ、注記して、「コクトーの戦いとは、彼がしばしば語るように、〈単独者〉対〈複数者〉の戦いであり、教会は〈複数者〉の表現であって超越性の表現ではない。それが決裂の理由」とする（Bouhours, *Ibid.*, p.204, 213）。カトリックは〈普遍〉を意味するので、まさにコクトーは反＝教会を選んだわけである。

47） *Ibid.*, p.282 アルノーは『コクトー伝』で、「金の葦とアクシオン・フランセーズには多くの繋がりがあった」と注記している。Arnaud, *Ibid.*, p.798

48） *Ibid.*, p.313, p.341 機関紙『アクシオン・フランセーズ』が禁書とされる前の注記である。この注はモーラスが対独協力の罪で収監されていた 1947 年版から削除された。ブータンによれば、マリタンはモーラス周辺のハト派をタカ派から分離しようとして失敗し、また禁書決定が噂される時期にモーラス主義者を正統的キリスト教義研究に誘ったが、これにベルナノスは批判的だった。Boutang, *Ibid.*, p.512, 517 ベルナノスはプロン社の「金の葦」出身の最も成功した作家である。Bouhours, *Ibid.*, p.196

49） Cocteau,《La Difficulté d'être》, in *Romans, Poésies, Œuvres diverses*, La Pochothèque, 1995, p.876

50） Cocteau, *Le Passé défini I, 1951–1952*, 1983, p.59

51） Cocteau, *Ibid.*, p.123 例外的に回想記のこの第 10 章では、原稿を書いている場所が明示され、回想される過去は表題に付された「1900-1914」を逸脱している。回想記の執筆動機の一端を明かす章と言える。